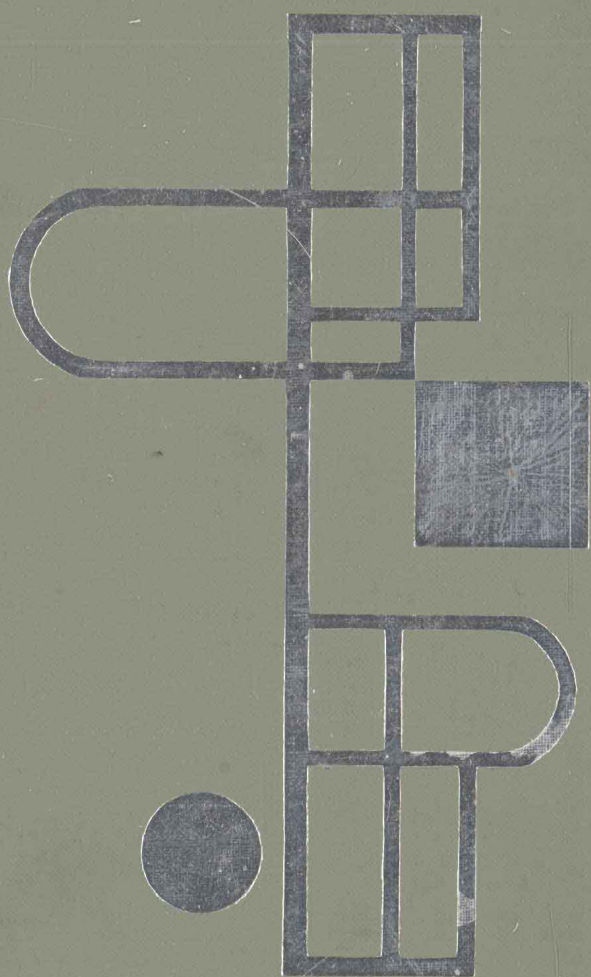
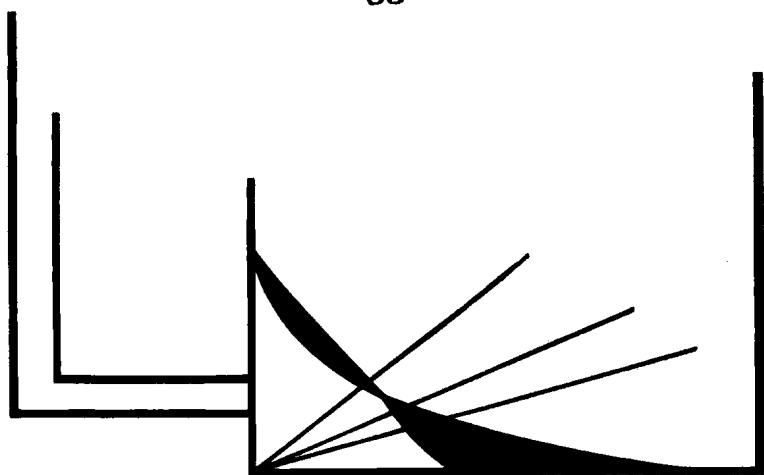




戰後小說集 (二)

新選 現代日本文學全集

33



筑摩書房版

戦後小説集(二)

昭和三十五年十一月十五日 発行

代著 庄野潤三
しょうのじゆんぞう

発行者 古田晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山田一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

〔電話〕東京三局例七六五一(代表)
振替 東京一六五七六八

整版 株式会社 精興社
印刷 株式会社 精興社
製本 株式会社 矢島製本所

戦後小説集(二) 目次

庄野潤三

流木……………五

プールサイド小景……………一九

五味康祐

喪神……………三〇

遠藤周作

白い人……………三〇

パロディ……………三三

安部公房

闖入者……………三七

鉛の卵……………三九

吉行淳之介

樹々は緑か……………四九

鳥獣虫魚……………一二

山崎豊子

船場狂い……………三三

死亡記事……………三三

菊村 到

硫黄島……………三三

三浦朱門

冥府山水図……………三三

陰謀……………三三

井上光晴

ガダルカナル戦詩集……………三三

城山三郎

プロペラ機・着陸待て……………三三

小林 勝

赤い壁の彼方……………三三

開高 健

パニック……………二四三

流亡記……………二六五

有吉佐和子

人形浄瑠璃……………二九二

曾野綾子

遠来の客たち……………三三三

べつたら漬……………三四〇

石原慎太郎

太陽の季節……………三四九

乾いた花……………三七〇

大江健三郎

飼育……………三七七

戦いの今日……………四〇九

解説……………山本健吉 四二六

装幀

恩地孝四郎
恩地邦郎

戰
後
小
說
集
(二)



流 木

庄 野 潤 三

沼四郎は、明け方、涼子から手紙が来た夢を見た。

——その白い封筒に書かれた字を見た瞬間、すぐに涼子から来た手紙だと分つた。不意に烈しく胸騒ぎがして、封を切ろうとする手がわなわなと震えた。(今こそ初めて本当のことが分るんだ。これまで、どうしても知り得なかつた彼女の内心の秘密が、この手紙で何もかもすつかり分つてしまふんだ) レター・ペーパーを開くのもどかしく、最初の一枚に飛びつく。その字は、まぎれもなく涼子のあの字だ。……あなたとお別れしてから一年半の歳月がたちました。お手紙を出そうと思ひながら、何度書きか

けては破り、書きかけては破りしたことでしょう。でも、到頭思い切つて……、言葉は最初から限らない思慕の情をこめて始められる。(あつ、やつぱり、あいつはおれのことを忘れてはいなかつたのだ。そら、見ろ。おれは間違つてはいなかつたんだぞ) 強い感動が襲いかかつて来た。すると、何ということだ。白いレター・ペーパーの文字が眼の前で水に溶け去るよう

うすれてゆく。追いつるやうに文字の行方を求める。今、このあとを読むことが出来なかつたら、涼子の心を知る機会はず永遠に去つてしまふのだ。早く、早く、今のうちに。大急ぎで残りを読んでしまおうと焦るのに、忽ち手の中の涼子の手紙は空に消えてしまつた。彼女はいつたい、あれから何を告げようとしたのだろう。その秘密は、一度はわが前に訪れて、そのまま飛び立つ鳥のように去つてしまつた。悔の思いが胸を浸している。やがて、夢がさめた。

もともと手紙も何も来はしなかつたのである。読み始めたばかりで夢がさめて後を読みたかつたと嘆いても、詮ないことではあつたのだ。

しかし、その夢が溶けてしまつて、そのあと

現に目覚めるあわいのしばらくを、沼四郎の胸を切なく浸したあの取り返しのない思いは、彼が早春の朝の光りの中に自分を見出してから後、不意に止んだ絃楽の音のように、慄えながら身うちに残つていた。

真柄涼子が沼四郎の前に現れたのは、彼が阪神間の私学として知られているその大学の四年に進んだ四月の始め——昭和二十五年のことである。

沼が中央講堂の二階にある劇研究会の部屋で弁当を食べているところへ、窓の下から彼の名を呼んだので、顔を出してみると、彼と同じ社会学科にいる友人の小山が、一人のおとなしうな女学生を連れて立つていた。

「ちよつと、降りて来てくれ」

沼は、おう、と返事して、弁当を机の上に置いて、部屋を出て行つた。

「沼さん、この人、劇研へ入りたい云うて来たらんやけど、よろしゅう頼みますよ」

小山は社会学科の総代をやつていた。そして、沼は三年の時から劇研究会の部長をつとめていたのである。小山が連れて来た女学生は、髪をうしろで無造作に短かく二つに分けて、白い小さなリボンで括つていた。色白で、眼鼻立のキリツとした、賢そうな少女である。

小山は、彼女が神戸の高等学校の時、演劇部にいたこと、ここへ今度入学したのは、うちの劇研究会へ入りたいためだと云うことを沼に話

した。その間、彼女はいかにも女学生らしく、羞んだ微笑を浮かべながら、沼の顔をじつと見ていた。

「名前は何かと仰言るんですか？」

「マガラ・リヨウウコです」

「マガラ？」

「真実の真という字と、着物の柄の柄と書きま
す。涼は、涼しいという字です」

彼女はキビキビと答えた。

「そうですか。女の人でも遠慮せずに鍛えますから、覚悟して入つて下さい」

沼がそう云うと、彼女は悪びれずにうなずいた。彼が真柄涼子から受けた最初の印象は、素直で、しつかりしたところのある女学生だと云うだけで止まつた。

入部してから二月の間に、涼子はその素質のよさ何よりも非常な熱心さを買われて、六月の始めに部内で行われた研究会で初めて役についた。この時、モルヒネ中毒のおばさんをやつた彼女の演技は、見に来た先輩から新人としてはかなりの好評を与えられたのである。

沼は、三十人近い部員をよく統率して、自分は演出に主力を注いでいた。彼のやり方には強引すぎるところがあつたが、それは永い伝統を持つ劇研究会を育て上げようとする彼の一途な熱情から来るものであつたから、部員はすべて彼の統制に服していた。

また演出面に於ける彼の感覚には、都会風に洗練されたものは欠けていたが、たしかに或る

カンの上さがあつて、作品の感情を誤たず捉えて、それを引き出してみせる力を持つていた。彼が二年続けて部長をつとめて来たのは、このためである。

女子部員は、真柄を含めて四人いたが、彼等に対する沼の態度は、初対面の真柄にはつきり云つたように、少しも甘やかすところがなかつた。稽古を無断で休む者があると、彼は女と雖も容赦しなかつた。新学期の始めに四十人を越えていた部員が、三月の間に十人以上も減つたのは、沼の態度のきびしさによるものである。

その年の夏、八月中旬に劇研究会は小豆島へ恒例の地方公演に出かけた。一行は二十四人で、そのうち女子部員が四人、真柄涼子もそのうちの一人であつた。彼等が滞在したのは、内海湾の東岸に位置する亀屋という旅館である。そこは、宿の真下がすぐ海であり、その前は小さく入り込んだ湾になつていた。この湾の外れに弁天島が見える。宿の背後は切り立つた崖で、裏の山へ続いていた。阪神間や南海沿線の海しか知らない部員たちには、夏の日に照り映えるエメラルド・グリーンの海はこの上なく美しいものと思えた。

着いた日の翌日から三日間、近在の安田の公民館で一回、内海の小学校で二回、都合三回の公演を行つたが、客の入りはあまり香しくなかつた。持つて行つた劇は、現代劇が一つと翻訳ものの童話劇が二本である。

最初の公演の夜のことである。第一回目的の童

話劇をやつてゐる時、沼が舞台の袖に立つてゐると、人形になつて出ていた涼子が走り込んで来て、大急ぎで少女の衣裳に着換えようとした。それを二年の矢田一枝が待ち構えるようにして、次の赤い服を差し出す。この日は涼子に取つては劇研究会へ入つてから観客の前でやる初めての劇だったので、すつかり上つてしまつていた。それで人形の白いドレスを勢いよく脱いだ拍子に、シュミーズまで肩から滑り落ちて、彼女の上半身がすつかり現れてしまつた。

沼は二間と離れていないところから、思いがけず涼子の裸身を見て、その美しさにハッと息を呑んだ。固い果実のような乳が二つ、沼の眼を射た。次の瞬間には、もう彼女の身体は少女の赤い服で覆われてしまつていたが、この時の強い驚きが、沼の心の中に初めて真柄涼子に対する愛を呼びさますことになつた。

島へ来てから四日目は、午前中に内海の小学校で最後の公演を終り、午後は自由行動になつた。部員たちは、明日の帰阪を前にして名残を惜しみながら、泳いだり、ボートに乗つたりして遊んでいた。

この日は午後から風が少し強くなつて来た様子で、亀屋の前の小さな湾の出口のところを、白い波が帯のように走つてゐた。宿の主人は、昼食の後で、沼に「危険ですから、ボートに乗る人はよく注意して、この湾から外へ出ないようにして下さい」と云つた。そこで沼は、皆が浜へ出て行く前に全員を集めて、二階の窓から

外を指さして、絶対に湾から外へボートを出さないようにと命じた。

沼は一人だけ部屋に残つて昼寝をした。どのくらい眠つたか覚えていないが、不意に慌しく彼を呼ぶ声で眼を覚ました。

「沼さん、田代のボートが流された!」

彼ははね起きるなり、窓際へ飛び出した。白い波の帯の向うを田代に乗せたボートが遠ざかつてゆく。彼が必死になつてオールを動かしている姿が見えているが、そのうちにも彼の着ている白いシャツがみるみるうちに小さくなつて、忽ち視界から消えてしまつた。

沼は「しまつた!」と叫んだ。(彼はこの時、あまりに早く田代の白いシャツが見えなくなつたので、気の小さい田代が狼狽のあまりボートから飛び込んだのではないかとも思つた) すぐに彼は階段を飛ぶように駆け降りて、浜へ走り出ると、部員の中から比較的しつかりした男を二人ずつ三組選んで、直ちにボートに乗つて田代を救援に出発させた。それから彼は宿屋から近くの醤油会社へ電話をかけて、機械のついた漁船を急いで一艘用意してもらうように頼み、更に警察へ遭難を知らせ、附近海岸からの搜索を求めた。

沼がその後の連絡を宿の主人に依頼して出て来ると、救援に出発したボートは三艘とも流されてしまつたらしく、どこにもその姿を見ることが出来ない。彼は事態が一層重大になつて来たことを感じた。

沼は宿屋から醤油会社の船着場まで約二キロの道を全速力で走つた。彼が漸く駆けつけた時、船頭が防波堤の中で出発の支度をしていた。船頭は「風が強いから、かえつて伝馬船で行く方が安全かも知れんが、まあやつて見ましよう」と云つた。船が動き出して防波堤から出た時、「おい、見つかつたぞ」と呼ぶ声が聞えた。振り返ると、事務所の人が走つて来た。その人は沼に向つて、宿屋から電話がかかつて、田代が亀屋から丁度内海灣の真向いに当る水木の岸にボート諸共流れついた旨連絡して来たことを知らせてくれた。沼はホツとしたが、救援に出た三組のことはまだ分らない。そこで彼等を探すために沼は船頭と一緒に亀屋の方をさして白波の騒ぐ海へ出て行つた。

彼は鉢巻をしめていた。田舎育ちの沼は平素から何かと云うと鉢巻をするのが好きだつたのである。それから船の中にあつた竹竿を船板の穴に突き立てて、その先に自分の着ていたランニングシャツを括りつけた。シャツは強い風を受けて旗のごとくたなびいた。

すると、弁天島の頂上から船に向つて白いシャツを振つている者があるのに氣附いた。船を近づけると、それは救援に出た中で一番度胸があると沼が考えていた三年の阿久津であつた。島には岸のところにボートが三艘引き上げてある。そして間もなく残りの五人が姿を現わして、沼に向つて手を振つた。

沼は、田代が無事だつたこと、これから彼を

対岸の水木まで迎えに行つて、帰りに六人を乗せてやるから待てと、大声でどなつた。

田代は海産物問屋の店先に、ひとりしよんぼり坐つていたが、探しに来た沼の顔をみるなり声を上げて泣き出した。彼は翌日になつて話したところによると、彼は最初の間必死になつて漕いで戻らうとしたが、どうしても押し流されてゆくの、思い切つて船先を対岸に向けて逆に力いっぱい漕いだというのである。彼の姿が矢のように視界から消えてしまつたのは、そのためであつた。

その晩、沼は田代には一言も叱らなかつた。そして、興奮して青くなつてゐる彼に葡萄酒を与えて、離れた六畳の部屋で先に寝させた。それから、彼は残りの全員を八畳の間に集めて一列に並べ、何も云わずにいきなり一人ずつ殴つて行つた。真柄涼子もこの時、頬を打たれた。

沼は、田代の危難に際して自分が大童になつて奮闘したにも拘らず、他の部員は大部分の者がそれほど真剣になつて心配もしていず、また助かつたことをそれほど心から喜ぶ様子もないのにすつかりむかつ腹を立てたのである。しかし、部員たちは、いつたい何のために突然殴られたのか、さつぱり訳が分らなかつた。

皆がようやく眠りについてから、沼は一人起き出して、浜へ出て行つた。暗い海面を風が吹きつづつていた。彼は髪を風に奪われながら、海に向つて立つていた。田代が危難を免れたのは、運がよかつたからである。もしもボートが

転覆していたとしたら、どんなことになつていだらう。田代はその年の四月に入部した学生だつた。実業家の一人息子で、両親の慈愛を一身に集めて育つて来た青年である。この地方公演に出発する時、天保山の棧橋へ母親がチョコレエトの箱を持つて見送りに来た。

「どうかよろしくお願いします」

そう云つてお辞儀をした時の母親の表情が、沼の目の前に浮び上つて来る。島へ来てから二日目の夜、彼は田代がボストン・バッグの中から持ち物を全部出して、一つ一つ手帳と見くらべながら印をつけているのを見た。いつたい、何をしているのだらうと思つて訊ねてみると、彼はこう答えた。

「お母さんに、行く前、持ち物は毎日点検するように云われたんです」

沼は思わず大笑いしたが、母親の云いつけをそのまま守つている田代の幼なさが、彼には滑稽にも可愛らしくも思えたのである。

(危いところだつた。もうちよつとであいつを死なすところだつた)

彼の戒めを守つてさえいれば、こんな大事には到らなかつたのだが、田代のためにはよき試験であつたらう。

海を見ているうちに、沼の心はようやく静まつて来るのを覚えた。帰ろうとして宿の方へ五六歩歩きかけた時、彼はそこに誰かが佇んでゐるのを見た。

「誰？」

返事がなかつた。近寄ると、浴衣ゆふいの寝巻を着た涼子が立っているのだつた。涼子は、沼の顔を見つめた。沼はまづすぐに涼子の眼を見つめた。沼が涼子の肩に手をかけると、彼女は沼の胸へいきなり顔を埋めて来た。二人は、そこで接吻した。沼の腕の中で涼子はハツキリ分るほど身を震わせ、汐の香のする唇がめくられてカチカチと歯が当つた。

翌日の新聞は、その年最初のグレイス颯風が九州長崎西方の海上に迫つたことを報じ、暴風特報が発せられたが、結局それは本土に殆ど被害を与えることなしに日本海へ抜けた。田代のボートを吹き流したのは、このグレイス颯風の前ぶれだつたのである。このため関西汽船が不通になり、彼等の帰阪は二日遅れることとなつた。

二

秋に入ると、劇研究会は十二月に朝日会館で行う定期公演を目ざして稽古を始めた。レバートルイは、サロイアンの「君が人生の時」に決定した。この劇は、登場人物が全部で二十六人の多勢なので、先輩が六人参加して、期せずして合同公演の形になつた。

演出は沼が担当し、彼はまたこの中でハモニカの上手なアラビヤ人の役を引き受けた。真柄涼子は抜擢されて、主役のキティ・ドウヴァルをやることになつた。

九月から十二月までの四カ月というのは、

彼等は全力を打ち込んで、この公演に当つた。沼は小豆島から帰つて涼子との間に手紙を交すようになつたが、夏休みが終つてから後は、彼に与えられた最後の大役を果たすためにあらゆる精力と時間をこれに注いだので、涼子と二人だけで何かをするということとは全くなかつた。彼は固く心に期していたのである。すべてはバトンを次の部長に渡してしまつてからのことだと。もつとも、二人きりの秘密を持つてしまつた彼等が、稽古中の何気ない眼と眼のすれ違いに、他の部員の誰にも分らない感情をこめることが出来たのは、無論のことであつた。だが、十二月の朝日会館に於ける定期公演が成功裡に終るまでは、部員の間で、沼と涼子の間に關して浮いた噂が持ち上るということは、ついぞ一度も無かつたのである。事実、二人は夏に最初の接吻を交して以来、その後再びその機会を得ることがなかつた。

冬休みが済むと、それ迄に就職の決つていない学生達は次第に焦り始める。沼は、しかし、悠々としていた。何故なら、彼には就職しようとする意志が全く無かつたからだ。彼は心から演劇を愛していたので、自分の生きる道は、これ以外には考えられなかつた。そして、演劇の道に進むためには、どうしても東京へ出て勉強しなければ駄目だつた。彼はある新劇団に入つて、勉強したいと考えていた。

劇研究会の部長のバトンを後任の阿久津に渡してから閑になつた彼は、六甲にある涼子の家

へ遊びに行くようになった。最初、彼を家へ誘つたのは涼子である。彼女は沼を自分の両親に引き合せたいと云つた。

「それから、堂々と交際しましょうね」

涼子の父は或る化学工業の会社の専務である。

沼が初めて真柄家を訪ねたのは、二十六年の一月の末であつた。海を見下す、がっしりした洋館建ての家の蔭のからまつた門の前に立つた時彼は何となく氣後れがするのを覚えた。彼は兵庫県の高砂の駅から一里も離れた田舎で育つた男である。在学中は四年間ずっと自分の家から汽車通学をして来たので、最も都会的な、洗練されたスクールカラーを持つ大学へ通いながら何時までも、麦畑や太陽の匂いを失わない男であつた。

その日は日曜日で、彼が通された奥の座敷では、涼子の父が他の客と碁を打つていた。五十年輩の、やや小柄で、精悍な浅黒い顔をした男である。沼を見ると、愛想よく笑いながら、「もう直ぐ勝負をつけてしましますから」と云つた。

沼は一眼見て、(こいつは苦手だな)と思つた。彼は人見知らない方であるが、涼子の父親を見ると、何となくスキのない、しんの冷い男のようで、融け込めないものを感じ取つたのである。彼のこの最初の印象は、碁の客が帰つてから、真柄の父が沼に向つて彼の家族のことを詳しく聞き出すに及んで、いよいよ動かし難いものとなつた。彼は、沼の三人の兄がどの

学校を卒業して、現在何の職業についているかまで尋ねた。もつともそれらの質問は、愛想のよい笑いと共にさり気なく発せられたものではあるが、沼はこの父親の態度を甚だしく不快に感じた。そして、彼の人間から或る卑しさをさえ感じたのである。

母親はかなりの美人であつた。恐らくそれは、涼子の父親がかなりの器量好みであつたことを物語つているように思われた。母親の方が確かに涼子よりも美しい顔立をしていた。涼子の顔は、母親に似ないで父親の方に似ているように思われた。それは、いやなことだつた。母親の方は、夫と反対に、どことなくのんびりしているように見えた。

その日、沼は涼子の家族と共に夕食を呼ばれた。父親は酒を飲まない。沼はそのことも氣に入らなかつた。沼は中学の時分から酒は強かつた。彼の家は、酒屋である。

涼子は、黄色のカーディガンを着ていた。この立派な家の中で父や母のそばにいる彼女を見ると、学校で劇の稽古をしている時とは違つて、すつかり良家のお嬢さんらしく見えて来るのだつた。沼の家も近在では比較的ゆつたり暮している方だが、それでも涼子の家へ来てみると、オレとは身分が違ふなあ、と云う氣持が折々頭をもたげた。

その晩、沼が真柄家を辞去して、舗装した坂道を大股に歩き出すと、すぐ後から涼子がサンダルを突つかけて追つかけて来た。彼女は沼に

追いつくと、いきなり声を弾ませて云つた。

「沼さん、まず及第よ。お父さんが賞めてたわ。しつかりした人だつて。お母さんもよ」

沼は思わず苦笑した。しかし、そう云う涼子の顔がいかに嬉し気なを見ると、イヤなおやじだね、と云うことは出来なかつた。

「これから、お家へ遊びにいらしてね。もう大丈夫だから」

「ああ、行くよ。だけど、お父さんやお母さんのお相手は御免蒙りたいなあ」

「アラ、勿論よ。今度からあたしのお部屋へ来て遊びましょうよ。お父さんやお母さんの相手なら、涼子だつてごめん蒙りたいわ」

二人は坂道を肩を列べて降りて行つた。果物屋の店先の明るい電燈の光りが林檎の上を強く照らしていた。涼子のカーディガンを着た肩が、幾度も沼の腕にやわらかくぶつかつた。

二月の中頃、沼と涼子は、劇研究会の阿久津と矢田一枝の二人を誘つて大山へスキーに行つた。

後になつて沼がこの時の旅行を思い返してみると、涼子の様子は出発の時からいつもと少し違つていた。彼女は学校にいる時も、また沼が六甲の家へ遊びに行つて二階の神戸の海を真下に見下す彼女の部屋で二人だけにいる時も、あまり口数が多くなかつた。物を云う時も續けて調子づいてしゃべることがなくて、ちよつと思を呑むようにして、それからゆつくりと短い台辞を云う時のように話すが涼子の癖だつた。

大阪駅から汽車に乗り込んでから、沼はこれまでに涼子が躁^{さう}いでいるのを見て、おや、と思つたのである。鳥取から米子へ向う途中のことだつた。汽車は幾度も幾度もトンネルをくぐり抜けて走つたが、ほんのちよつとしたトンネルを通過する時は、車内が一瞬真暗になつてしまふのだつた。

涼子と沼、矢田一枝と阿久津が、夫々^{それぞれ}の方を窓側に置いて坐つていた。四人は膝の上に涼子のスーツケースを置いて、その上にトラムプを列べて遊んでいたが、涼子の肩が笑つたりする拍子に沼の腕に何度も触れる。そして、沼には涼子の肩の先から暗黙のうちに彼女の気持が通じて来るのだつた。沼の腕もそれに応えていた。

またスツケースの下で、涼子の膝頭のまるいところが、列車が揺れる度に沼の膝にやわらかく押しつけられ、そのまま離れないで、動揺と共にあるのだつた。トラムプの札をめくりながら、沼の意識は二人の膝頭の密着した部分に痛いほど集中されて、その部分だけが燃えるように熱く思われて来る。

やがて、四人は、トラムプに飽きて、そろそろ「早く米子に着けたい」だの「汽車から降りて走りたい」などと云い始めた。その頃、汽車が短かいトンネルを一つ抜け、二つ抜け、三つ目に入つた、瞬間、沼は左手をすつと隣りの涼子の手の上に移して、ギユツと握つた。すると、彼が握つた手がそのままアツと思う間に持

ち上げられたかと思うと、指の上から彼女の齒^はが嚙^かんでいた。(痛い!)と思わず出かけた声を危く耐えて、涼子の口から左手を離れた瞬間、列車はバツと明るくなつた。

その晩は米子で泊り、翌日、佐磨までバスで行き、そこからスキーを穿いて大山へ登つた。頂上まで是一直線のなだらかな傾斜で、小松原がひろがつている。太陽が南に傾いて、明るい光りが純白の雪野原をかがやかに照らしていた。途中まで登つて来て後ろを振り返ると、日本海の濃い青が彼方にひろがつていた。

スキー客は、週日であつたせいか、思つたほど多くなかつた。沼たちは頂上の宿に二日間滞在して、思う存分、雪の中で暴れ廻つた。涼子は高等学校の時に冬休みには親戚の女学生たちと信州の菅平や志賀高原へ出かけて行つたので、四人の中では一番上手だつた。矢田も涼子ほどではないが、かなり滑れた。男の方はどうみても見劣りがした。阿久津はそれでも一度中学時代に牧野へ行つたことがあり、直滑降ならやれた。一番不器用で、みんなからさんざん笑われたのは、沼であつた。彼は急傾斜のところでも構わず試みてみて、甚だ勇敢であつたが、五米も走り出したかと思うと雪煙りを立てて転倒した。

彼等は大山神社からまだ上へ登つた、北壁と呼ばれる傾斜のところまで終日滑つた。そこからは真下に日本海が見下され、雪の山頂に立つて見る海の色は、しみじみとするものがあつた。

山上で迎えた二日目の夜のことである。掘り炬燵^{こたて}の中に入つて、沼と阿久津がかわるがわる怪談をやつた。沼も阿久津も話術が巧みで、女たちをよろこばせた。しかし寝る時になつて、二人はこわいと云い出し、男たちの部屋との境の襖を半分開けて置こうと提案した。襖を開けることを云つたのは矢田一枝である。彼女は心からこわがつていた。

布団の中から顔を出した沼は、阿久津も矢田も床に入つてしまつてから、涼子が顔をこちらへ向けた時、指を出して、おいでおいでをした。すると、涼子は、(だめよ、だめよ)と云う風に顔を振つた。それはいかにもあどけなく見えた。

沼の部屋は電気を消していたが、涼子たちの方はこわいと云つて灯りをつけたまま寝ていたのである。沼は永い間待つていた。涼子は向うを向いて寝ていたが、まだ眠つてはいないことが分つた。

阿久津は間もなくおおらかな聲を立て始めた。矢田は眠つていのかどうか、沼には分らない。彼の頭の中には、眼を閉じると、忽ち小豆島の公演の時に舞台の袖で見た、あの固い果実のような乳があざやかに浮び上つて来て、離れようとしなかつた。

どのくらいかたつて、ふつと彼はまどろみかけていたのに気附いた時、襖の向うで涼子が音もなく夜具の中から抜け出て、部屋を出て行くこととするのを見た。その後、ちよつと間を置いて

て沼は立ち上つた。

階段の音がきしむのを気にしながら降りて来ると、便所の前の手洗いのところに佇んだまま、涼子が空を見上げていた。沼を見つけた時の彼女の表情には、驚きや怖れに似た色は現れなかつた。

沼はいきなり彼女の肩に手をかけて、荒々しく引寄せた。涼子は力なく、そのまま沼の腕の中に倒れかかつて来た。

二人は永い接吻をした。それは、小豆島の夜の強い風の中での最初の接吻とは違つたものだつた。涼子の舌は誘われて優しい生きもののように入つて来た。

そのまま沼は、彼女を抱き上げるようにして、廊下の横の空いた部屋へ入つて、襖を閉めた。涼子は無言のまま強い力で抗つたが、それは恰も恋人を鼓舞するためのものようであつた。

三

卒業の日が近づくにつれて、沼は漸く焦り出して来た。

彼の東京行は、父親から強い反対を受けて、実現は全く困難となつたのである。彼の長兄は、七十に達した父に代つて家業を継ぎ、高商を出た二番目の兄は神戸の銀行に勤めて居り、三番目の兄は下関で海産物の店を経営していた。三人とも家庭を持つて、立派に一人立ちしている。沼の父は、彼が劇研究の仕事に没頭して学業をかえりみないことに以前から強い不満を持つて

いた。

沼は、自分が東京へ出て俳優修業をすることに對して、当然父の反対を予期していたが、いよいよそれを口に出した時、それほどまで父が激怒するとは思つていなかった。父の意志に反して強行すれば勘当すると云われた。彼はたしかに甘く考へ過ぎていたのである。

母親は、家の中で彼の唯一の味方であつたが、父の烈しい怒りを前にしては、それを取りなす術もなかつた。沼は自分が苦境に陥つたことを認めないわけには行かなかつた。

更に彼を当惑させたのは、真柄家の彼に對する態度の変化である。彼女の母親は、彼に向つて婉曲に、彼の就職先がまだ決まらないことを不満に思う様子を、話の間にチラチラ示すのだつた。しかし、それは母親だけではなかつた。

或る日、涼子の部屋で、沼が婚約をしたいと云つた時、涼子はね返すように云つた。

「駄目よ、沼さん」

沼は意外な拒絶に合つて、狼狽した。

「どうして、駄目なんだ。駄目なこと、ちつともないじゃないか」

すると、彼女は真面目な顔をしてじつと沼の眼を見ながら云つた。

「沼さん、あなた将来どうするつもりなの？」

「どうするつて、芸術家になるんだ」

涼子は、いたずらつぽく笑つた。

「どうして暮すの、二人で？」

沼は、口ごもつたが、すぐ押しつけるように

云つた。

「共稼ぎしよう、涼ちゃん」

「いやよ」

その声は、沼の抗弁を許さぬ響きがあつた。

「あたし、共稼ぎなんかいやよ」

「じゃあ、どうしろと云うんだ」

「就職してほしいの、早く」

沼は黙つてしまつた。

「沼さん、本当に高等学校の先生でもいいから、就職してほしいの。そしたら、何とかなるわ。東京へ行つて新劇に入るなんて、夢みたいなこと云つてたら、どうして生活してゆけるの？」

あたし、いやよ。そんなこと」

「君がそんなこと云い出すとは思わなかつたよ」

「だつて、沼さん、あたし、本気で云つてるのよ。お願いだから、早く、どこでもいいから就職して頂戴。でないと、家のお父さん、とても婚約なんか許してくれないわ。それに、あたしまだ三年も学校へ行かなきあならないのよ」

沼は、腹の中が冷くなつて来た。涼子の話を聞いていると、自分の未来に對する氣持がひとりぎめの、無計画きわまるもので、生活をどうするかと云う肝腎な点についてはまるきり自信がないことに氣附いた。

彼は、どんなことがあつても、涼子と結婚したかつた。それで、涼子の口からそんな風にはつきり云われると、他愛もなく、自分というものがグラついて来るのを感じた。

沼に取つて、涼子が最初の女ではなかつたが、これほど好きになつた女はいなかつた。それまでに知つた女は沼が一度その身体を自分のものにしてしまえば、見栄も忘れて彼にすがりついて来ようとした。しかし、涼子の場合には違つた。

大山の夜の場合は、樹上の果物を落すために沼の払つた労力は意外にも軽くて済んだ。彼はそんなに強く幹をゆすぶらなくてもよかつたのである。しかし、涼子はそれ以来、むしろきびしく彼に接するようになった。彼女はいつもベッドを置いてある自分の部屋に沼を通したが、大山以後二度と彼に身体を許さなかつた。それはばかりか、接吻さえ許そうとしなかつた。彼女は、實際毅然としてゐるので、沼は氣後れがして彼女を抱くきつかけを見つけることが出来なかつたのである。

沼は、次第に自信を失くして行つた。

やがて彼は卒業してしまつた。しかし、就職は決まらなかつた。涼子に頼まれても、沼自身、就職口を探そうという氣持にはならなかつた。彼は東京行の希望を捨ててはいなかつた。

卒業式の翌日からその年の夏まで、沼は殆ど毎日のように高砂の自分の家から六甲の涼子の家へ通つた。一日行かないと、もう次の日は彼女の顔を見ないでは辛抱出来なかつた。それに、家にいると、大学を卒業したのに勤め口もなくて毎日家にブラブラしていられると近所の手前みつともない父は罵るし、それを聞くのが辛さに母親は彼に百円札を一枚渡してどこでもい

いから行つて来ておくれと頼むのだつた。それで彼は朝から自転車に乗つて加古川の町へ遊びに出掛け、夕方四時を過ぎると、汽車に乗つて出かけるのだつた。涼子の家へ着くまで一時間半かかつた。彼女がまだ帰つていない時は、上り込んで彼女の部屋へ行つて書棚から本を取り出して読んでいた。涼子はずいぶん沢山の本を持つていたので、彼はよく本を借りた。

沼は学生服のズボンの上からジャンパーを着ていたが、暑くなつて来ると、カッターシャツのまま家を出て行つた。いつも無精髭を生やしているのも、風采はすこぶる上らない。涼子の母親は、殆ど毎日のように沼がやつて来るので、少しづつ、いやな顔をするようになって来た。

涼子は、しかし、嫌がりもしなかつた。一度、試験の成績が悪かつた時、「沼さんのせいよ」と云つたことがあるが、そんなに毎日来ないで頂戴とは云わなかつた。

彼女は、時々沼に、早く就職してほしいと云つたが、沼は「うん」と云うきりで、そのために学校へ教授を訪ねに出向いたり、先輩のところを廻つたりする氣持にはどうしてもなれなかつた。彼はやつぱり東京へ出たかつた。しかし、家から金を出してくれる希望は既に失われていたし、東京へ行つて頼るべき知人は誰一人いなかつた。

それから、思い切つて彼が東京へ飛び出して、何とか向うで働き口を見つげようとする冒険を敢行出来ない理由は、今、涼子のそばを少しで

も離れてしまうことが怖しかつたのである。東京へ行つてしまえば、涼子との間はそれきり隔りが出来てしままいそんな不安が強く働いてゐた。彼は涼子が今もなお自分を愛してゐてくれると信じていたが、その氣持はともすれば揺らぎがちであつた。

それで、その不安をなくするためにも、どうにかして早く彼女と婚約を結んで、二人の關係を決定的なものにしたいと焦つた。しかし、それを云い出せば、彼女は今のような状態ではとても不可能だと言ふし、就職口を見つけると云つても、時期はとつくに過ぎていたし、自分の成績のことやなにか思うと、とても駄目だと諦めてしまふのだつた。それに、若し自分が東京行の志を挫げてどこかへ就職したとして、果して涼子がすぐに婚約に應ずるかどうかを考えてみると、それとも危いような予感がするのだつた。

涼子が就職のことを口にするのは、結婚に対する彼女のハツキリした返答を避けるための口実ではないかと思われる節があつた。一度、彼女は彼女の部屋で何となく浮かぬ顔をしてゐた沼の顔を、いたづらっぽく見つめて、「人間は、一度失恋しなきあ、偉くなれないのよ」と云つたことがある。

沼はその頃、涼子と時たま三宮へ映画を見に行くことがあつたが、そんな時、彼は涼子と列んで坐つていても、次第に氣が減入つて来て、何時ともなく心は画面から離れてゐた。

彼が沈んでいると、涼子は時々、机の上の紙をクルクルと細長く巻いて、それを望遠鏡のように眼に当てて、無精髭を生やして冴えない顔の沼をのぞきながら、ゆつくりとそれを動かすのだった。

彼はその頃では、親戚からも相手にされなくなっていた。兄の中では神戸の銀行に勤めている二番目の兄が、比較的彼に対しては寛容であつたが、六月の初めに沼がすり切れた下駄を穿いて現れて、三百円貸してほしいと頼んだ時、「お前にはもう貸してやらんよ」と断られた。

彼は、それまでも、酒代や煙草代に窮しては、この兄のところへ金を借りに行つていたのである。

この時、そばでラジオのダイヤルを廻していた高等学校二年になる甥が独りごとのように云つた。（彼は自分が県立の優秀校と呼ばれる学校に行つて居ることが、かねがね自慢で、大学は京都大学へ入るといつでも云つていたので、沼はその秀才面が気に喰わなかつた）

「僕は、大学卒業したら、四郎ちやんみたいに遊んでんと、すぐに就職するよ」

この言葉が終つたか終らないうちに、猛烈な音がしたかと思うと、甥は畳の上に引つ繰り返つていた。沼が飛びかかつて、頬に一撃を加えたのである。

兄は黙つていた。兄嫁はじつとうつむいていた。部屋の中に異様な沈黙が続いたが、次の瞬間、ワツと叫んで、兄嫁は畳の上に泣き伏した。

その晩以来、沼はこの兄の家には行けなくなつた。このようにして、沼はますますみじめになつて行つた。

或る時、沼は日曜日に涼子の家へ出かけて行つたが、彼女は留守だつた。母親は娘がどこへ行つたとも云わずに、沼の顔を見るなり「涼子は居りませんよ」と云つた。その言葉に怯んで、彼は部屋へ上つて待つつけかけを失つた。彼は六甲の駅へ引き返して、そこで朝の十一時から晩の十時半まで涼子を待つていた。その間、腹が空いて駅の横の食堂へうどんを食べに入つた時以外は、十一時間半というものの、駅から一歩も動かなかつた。待つて待つて待ちくたびれて、やつと夜更けの電車から降りて来た涼子の姿を認めた時、彼は思わず崩折れそうになつた。

改札口を出て来た涼子は、沼を見て驚いた。

「どうかしたの、沼さん？」

沼は（こんなに長い時間待たせてあんまりじやないか）と怨めしく思つたが、氣弱く首を振つてから、

「どうしてなの？」と聞いた。

「神戸のお友達の家へ行つてたのよ。ずつとここにいらしたの？」

「うん」

「まあ！……ごめんね」

「家まで送つて行こう」

「でも沼さん、帰りの汽車に間に合うの？ いわよ。あたし、ひとりで帰れるから」
「いいんだ。間に合う」

沼は涼子を家まで送つて行く途中、何時までこんな苦しい氣持を続けなければならぬのだらうと思ひ、知らず知らず重い溜息をついた。

夏が来た。その年の夏休みには劇研究会は徳島へ地方公演に行くことに決つた。徳島には涼子の叔母の家があるので、彼女がマネージャーの岸本と一緒に出来ることになつた。

その出発の前日に、沼は涼子に会つて「婚約を決めたいから本當の氣持を云つてほしい」と申し出た。この時彼女は「船の中でゆつくり考へて、帰つてからお返事する」と答えた。沼は、もうこれ以上今の儘のような状態でするすると日を送ることが堪えられなくなつたのである。

涼子が徳島から歸つた日に、沼は六甲の家へ会いに行つたが、彼女は留守だつた。翌日もう一度出かけて行つたが、また留守だつた。三日目に、やつと手紙が来た。それには、お話ししたいことがあるから、土曜日四時に六甲ガーデンへ来てくれるようにと書いてあり、その終りに「自由への道」をその時返してほしいと書き添えてあつた。

「自由への道」は、沼が三月に彼女の本棚から借りて行つたままになつていた本だつた。その文句を読んだ時、沼は氷のかたまりをいきなり腹に押し当てられたような氣持がした。

その手紙を受け取つたのは水曜日だつた。沼は学校へ出かけて行つて、劇研究会の部屋で他の部員と地方公演に持つてゆく衣裳の整理をやつていた涼子を部屋の外へ呼び出した。

「手紙ついた？」

「うん。土曜日は僕は都合が悪いんだ」

「そう、じゃあ、何時がいいの？」

「金曜日にしてくれ」

「いいわ。明後日の四時ね」

沼がその儘階段を降りて行こうとすると、うしろから涼子が云った。

「自由への道、忘れずに持つて来てね」

沼は、本当は土曜日は何も都合など有りはしなかつた。ただ、彼女の手紙の指定に従うことが頼だつただけである。ところが、彼はこのために大変な失敗をしてしまった。

彼はわざわざ涼子に会いに行つて約束の日を変更したのに、彼はそのことを次の日にはきれいに忘れてしまつて、金曜日には行かずに土曜日の午後四時に六甲ガーデンへ行つたのである。彼は四時から六時まで待つたが、涼子が何時までたつても現れないのに業を煮やして、彼女の家まで行つた。母親が出て来て、「まだ学校から戻りません」と云つた。それで沼は、今度は駅へ行つて彼女の帰りを待つた。

いくら待つても涼子は帰つて来なかつた。沼はだまされた怒りで腹の中が煮えくり返る思いだつた。涼子がやつと戻つて来たのは、終電車の一つ前だつた。しかも彼女は、マネージャーの岸本と肩を列べて、小さな風呂敷包を提げて楽しそうに笑い声を立てながらフォームから出て来た。沼は、それを見た瞬間、躍りかかつて二人を殴り殺したい衝動に駆られた。

しかし、二人の前に立つと、そんな遅い時刻に涼子の帰りを待つていたことで、岸本に対して氣後れがし、こちらから氣弱く微笑しかけた。岸本はびつくりした様子だつたが、

「今度の公演に持つて行く衣裳の飾りを買いに、あつちやこつちや廻つてましたら、えらい遅なつて——」

と云つた。手に提げている包の間から銀紙でこしらえた星のぞいていたから、それは事実に違ひなかつた。

岸本は涼子を家まで送つて行くつもりで来たのだが、沼が待つていたので、涼子に、

「御苦労さんでした。おやすみ」

と云い、沼に会釈して、またフォームへ戻つて行つた。涼子は沼の方を見もせず歩き出した。沼はすかさず、その横について歩き始めた。二人とも頑なに黙つてゐる。二人の靴音だけが、深夜の坂道に響いた。

広い十字路のところまで上つて来た時、沼は涼子の腕をぐつと捉えて、立ち止つた。

「今日、どうして来なかつたんだ」

すると、涼子は刺すように沼の顔を見て、云い放つた。

「あなたこそ何よ。昨日の約束だつたのよ」

沼は、ぐつと詰つた。日を取り違えた事に初めて氣附いたのである。

「あなた、どうかしてるんじゃない？ あたし、二時間待つたわ」

彼女は冷やかに沼を見据えている。沼は頭の

中がカツと熱くなつて来た。

「こんなに遅くに駅で待つてたりするの止してほしいわ。岸本さんだつて変に思うわ」

沼は黙つていた。

「あたしが岸本さんと帰つて来たから怒つてるのね。あたし、岸本さんと何んでもないのよ」

この言葉を云い終らないうちに、沼の猛烈な平手打ちが彼女の頬を襲つて、続けさまに四回、烈しい音を立てた。

涼子の身体はぐらぐらと揺れたが、危うく自らを支えた。その間、彼女の眼は、大きく見開かれたまま沼の顔から離れなかつた。

低い声で彼女が云つた。

「ひどいことをなさつたのね」

沼は、じつと涼子の眼を見つめた。何もかも、これでおしまいだと云う思いが胸に來た。彼は、ゆつくり言葉を押し出すようにして云つた。

「僕に云わせてくれ。涼子ちゃん、別れよう」

この時、涼子はワツと泣き出した。幼い子供のように、声を放つて泣いた。沼は、彼女が身体を震わせて泣くのを見ていて、どんな力をもつてしても、彼女を泣き止ませることが出来ないように思われた。

やがて泣きじやくりながら、きれぎれに涼子は云つた。

「沼さん、あなた、いい人よ。……御免なさいね。……あなた、やつぱりいい人よ」

沼は胸がつまつて、一言も云えなかつた。彼は駅の方へ引き返そうとした。すると涼子は彼